



随 筆

ペルー古代遺跡紀行

埴 輝 雄*

Looking around ancient relics in Peru

Key Words : Peru, Andes, Relics, Inca

1. ま え が き

ペルーと言えば人質事件を連想する昨今であるが、黄金のインカ文明、謎に満ちた前インカ文明は旅心をそそって止まない。昨年第2の停年を迎えたのを期に、現地の治安を考慮して、10日間のバックツアーに参加したのである。ペルーは遠く、現地での宿泊地はリマ、クスコ(2泊)、プーノ、イカ、リマの順で僅かに6泊で、自由時間は0であった。アンデス山中の3泊は短か過ぎると思ったが、高山病にかかり、プーノのホテル(海拔3,800m)では食欲も無くなり、3日が限界であった。今この文を書いていると、当時のつらさを忘れて、インカ帝国の都クスコには更に1~2日滞在したかったと思う。

1. リ マ

国際空港から市内に向う途中、高い塀をめぐらせた建物が次々と目に付いた。塀の角や門の上部には見張ボックスが取り付けられ、塀の上には忍び返しまで付けてあるので刑務所か兵舎かと一瞬思ったが、大きな工場、倉庫、金持の住宅等であった。治安の悪さが実感された。もう一つはスモッグと間違えた霧で街が包まっていたことである。6~11月の冬期は遙かに濃い霧で包まれると聞いた。霧は“エルニーニョ”

のせいである。“エルニーニョ”が来ると海水浴が出来る”と生活実感に結びついている。私共は赤道附近の南米沖に出現する熱い海水塊を指す気象用語と思っていたので、目が開かされた思いがした。ペルーの国土の大部分は熱帯に属するのであるが、太平洋岸は北流する寒流に洗われ、アマゾンの湿った大気はアンデス山脈で遮られる為、乾燥し、夏でも然程暑くはないのである。南流する暖流“エルニーニョ”が寒流と岸の間に割込んで来ると、リマ附近では霧、北部では雨となるわけである。最近北部の雨が多くなり、前インカ期の貴重な遺跡が破壊されつつあると聞いた。

ペルーで最初に口にしたのは昼食の時出された白色の食前酒“ピスコサワー”であった。これは蒸留酒に卵白、ライムの果汁、若干の砂糖を混合したもので、以後は専らこれを注文することにした。但し、高山病が進んでからは止めた。

食後、専用バスに乗り、砂丘の間を約30分走って最初の見物地、パチャカマ遺跡に到着した。パチャカマとはインカに征服された部族が信仰していた“天地創造の神”である。インカ帝国は13世紀ごろ、アンデス山中、チチカカ湖附近に興り、15世紀に急速に範囲を拡大して大帝國を作り上げたが、16世紀半ばにスペイン人によって亡ぼされた。

その期間は我が国の鎌倉から室町時代に当り、そう古い時代ではない。インカは被征服部族の信仰を認めたが、帝國が確立した後は自らの神、太陽神を広めるため、各地に祭祀センターを建造したのである。実際、海を見下す丘の頂上に



*Teruo HANAWA
1926年2月23日生
1948年大阪大学理学部化学科卒業
現在、理学博士、表面物理学
TEL 0726-25-2828

石積の太陽の神殿の跡があり、アドベ製のピラミッドと併立していた様が判る。何れもスペイン人に完全に破壊された跡を一部復元したものであった。

帰途、黄金博物館へ立寄って、7時ごろホテルに入った。遺跡も、博物館も期待外れで、どちらも省いて、代りにリマ市内の国立博物館とか天野博物館等の見学に当ててはしかった。

2. ク ス コ

その昔、インカ帝国の首都として黄金と美女を集めた、アンデス山中の町クスコ程旅心をそそる場所は滅多に無い。リマを9時に出発したフォーセット航空の古いB737機は、1時間足らずで海拔3,400mのクスコ空港に到着した。飛行中の客室気圧は725mb、クスコの気圧は685mbであった。機内圧が低かったのは与圧装置の故障ではなく、高地馴化を計ってくれたのだと解釈しよう。おかげで、高山病の兆候は現われなかった。しかし予防のため、昼食後、コカ茶を二、三杯飲んで遺跡回りに出発した。コカ茶はコカの乾燥葉を煮出した、味の薄い飲物で、不味くもなく、美味くもなかった。コカはペルーとボリビア国内に限り公認されていることに注意しよう。



写真1 クスコ 太陽通り

市街地を見下す北方の丘に登ると、広大なサクサイワマンの遺跡に到着する。バスで登ったのであるが、何となく後頭部が痛む感じがしたし、10m位の城壁を登るのがやっとという感じであった。これが高山病の始まりであった。



写真2 サクサイマワンの城壁(クスコ)

城壁は写真に見られるようにジグザク型の三層構造で、全長360mとの事である。使用されている石の大きなものは216トンはあると見積られている。これらの巨石は45～50km離れた所から運ばれ、加工されて写真に見られるように、目地なしで全く隙間なく組合わされているのである。インカ帝国には車も鉄器も無かったとされているが、本当であろうか。石と石との接触面に隙間を無くするには、石同士をスリ合わせれば良いが、その前段階の石の成形はどうして行ったのであろうか。



写真3 城壁の石組(サクサイマワン)

この城砦はインカ帝国最盛期に2～3万人の労働者が80年間働いて作り上げたといわれている。石の運搬は人海戦術で可能と思われる。しかし石組みには限られた人数しか働けないので、如何なる技術が用いられたのであろうか、興味は尽きない。

砦の上部は居住区になって居り、5,000人が



写真4 サクサイマワン城壁の上の遺構、円筒形の塔の基礎と言われている。

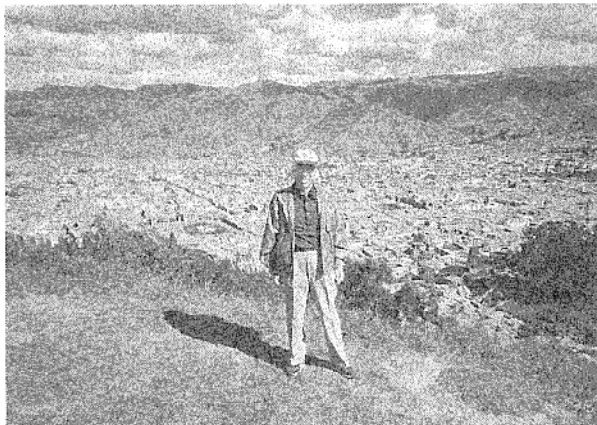


写真5 サクサイマワンからクスコ市街を望む

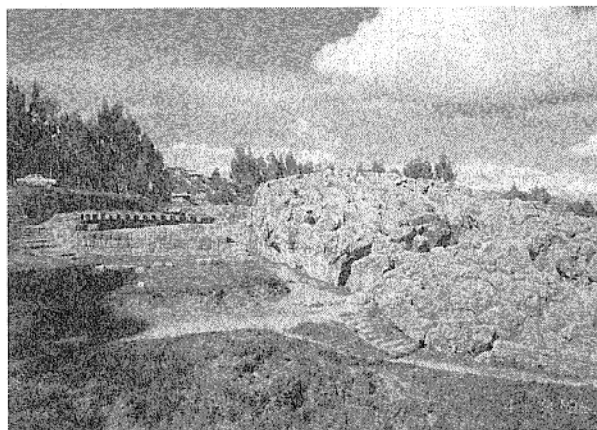


写真6 ケンコー(クスコ)

住める位の建物と塔があったとされている。しかしスペイン人によって破壊され、動かし得た石は南側の急斜面の上からクスコ市内へ投げ落され、彼等の建築資材となったと言われている。城壁の前は広大な広場となって居り、毎年6月24日にインティライミ(太陽の祭)がインカの

儀式に則って行われ、人口30万の都市の収容力を遙かに上回る10万の人々が集まるとの事である。

サクサイマワンから車で数分登るとケンコーと呼ばれる岩の遺跡がある。写真に見られるように凹凸の激しい岩であるが、自然の岩を削って作られたものである。岩の上には犠牲の血を流して占いを行ったとされる溝が刻まれ、飛鳥の酒船石を思い出した。岩には割れ目があり中に入ることが出来る。そこには皇帝の座とか生け贄の台と呼ばれる削られた岩がある。

ケンコーから少し山道を登ると右側にプカブカラ(赤い砦)と呼ばれる遺跡が見えるが、之はクスコに入る道の関所の役割を果たした所で、名前は、城壁の材料、赤色安山岩に由来する。近くまで行っても仕方がないので見物は省いた。



写真7 タンボマチャイ(クスコ)

山路を更に登ると、すぐ、タンボマチャイに到着する。タンボは宿、マチャイは洞窟を意味するが、インカ時代の沐浴場と考えられている。四段の石垣からは絶えず水が流れ落ちているが、雨期、乾期を問わず、常に一定の水量を保っているのでは、地下水をサイフォンの原理で引いているのではないかとされている。石組は最上部がインカの特徴を示し下部は粗雑であるから、前インカ時代に多分水汲み場として築かれていたものと思われる。

3. マチュピチュ

3日目は今回のツアーの目玉、マチュピチュ行である。早朝4時半のモーニングコールで起

床、5時に朝食、5時半出発、6時、市内のサンペドロ駅発の二両連結のディーゼルカーで出発という慌ただしいものであった。列車は数回のスイッチバックを繰返して、標高3,700mのクスコ峠を越え、列車や山々の長い影を左に見ながら寒々とした高原を走り、ウルバンバ川を渡り、約2時間でオリヤンタイタンボに到着、しばらく停車した。忽ち、手に手に壁掛け、山高帽、カーペット、茹でたトウモロコシ等を持ったインディオのオバサン達の大群が窓の下に押寄せて来た。同行の数名の人々がトウモロコシを買ったが、日本では飼料用にされる大粒のもので、まずくて持て余していた。

列車はサボテンの群落が混った貧相な樹林帯を縫って、川の右岸を下って行く。対岸は巨大なアンデスの山裾が威圧するような岩壁となったり、薄く草に覆われた優美な急斜面となったりして川原に落ち込み、旅人を飽かす事はない。



写真8 クスコからマチュピチュへ行く途中の鉄道駅オリヤンタイタンボの物売り



写真9 ウルバンバ峡谷(オリヤンタイタンボ駅)前方の雪を頂く山々はアマゾン寄りの東アンデス山脈

9時20分、プエンテルイナス駅に到着、ミニバスに乗り替えて、急斜面に作ったつづら折の地道を登ること20分でホテル前に到着。少々歩いてゲートを入れば、写真でお馴染みの遺跡を見下す標高2,400mの地点に立つことになる。遺跡の上部の平地はかなりの広さがあり、尾根を切り取って造成したに違いないと感じた。この時掘り出した大量の石を使って、この類い稀な空中都市を建設したのは、インカよりかなり昔のことらしい。ガイドの説明によると、米人、ハイラム・ビンガムがこの遺跡を発見した1911年当時は、熱帯性のジャングルに覆われていたとの事である。ウルバンバ峡谷はアマゾンに開口しているため、湿潤な大気が流入し、雨が多いので段々島の生産力は、かなり高いものであったと思われる。恐らくトウモロコシやジャガイモ、豆等が栽培されていたのであろう。畑の面積から自給可能な人口は2千人位ではないかと見積られる。この都市が見捨てられた理由は不明であるが、水源地域の木を伐り過ぎて水が枯れた為かも知れない。実際、水汲み場の水量は極めて少かった。



写真10 マチュピチュ全景
遺構の背後はワイナピチュ、(2,400m)背後

インカの建物はすべて破壊されてしまったが、ここマチュピチュだけが唯一の例外である点も特筆せねばならない。但し草葺きの屋根や丸太のハリは残っていない。不思議な構造物の一つはインティワタナ(日時計)と呼ばれる石柱のある石である。手間がかかり過ぎている上、目盛も何もついていないので日時計説は信じ難い。超古代の記録を刻みつけたとされる“イカの模

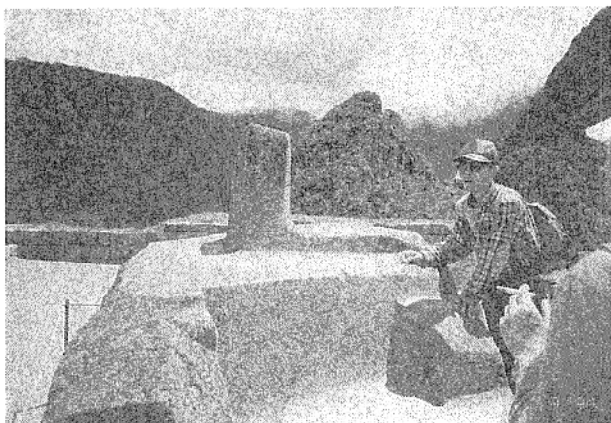


写真11 インティワナコ(日時計)? マチュピチュ

様石”の中には、同じような石の柱を間にして二人の人物が何やら儀式を行っている情景があることを指摘しておきたい。もう一つは遠方に見える山の稜線を写したとされる、幅約8m、高い所は3.5m位一枚岩である。風水の観念があったのであろうか。ガイドの話では“両手を広げて石に身体をあずけると、靈感をうける”との事であったが、実行した結果は否定的であった。

山上の都市の先に見える急峻な峰はワイナビチュ(若い峰)と呼ばれ、頂上まで登る事が出来る。頂上附近の段々畠は恐らく神に捧げる作物を栽培したのであろう。最後に、この遺跡の一角には石切り場があり、石を割った跡が見られる。

写真に見られる四角の穴に乾燥した木片を打ち込み、水を掛けて石を割ったと言われている。

このような穴を掘るには鉄器が必要と思うが、考古学者はインカに鉄器と車輪はなかったと言っている。



写真12 石材切断の跡(マチュピチュ)

山上に4時間止まり、歩き回ったのであるが、クスコから1,000m低くなっただけで高山病の症状はウソのように消え去っていた。しかし列車がクスコに近づくと又もや頭痛が始まった。

4. チチカカ湖(4日目)

水面の海拔3,800mのチチカカ湖の空の玄関、フリアカにはクスコから30分足らずの飛行で到着した。さびれた街を抜け、薄い草原の間を走るバスの窓から、時々赤い作物が作られている畑が見えた。聞くと“キヌア”というアカザ科の植物で、粟のような種子を食用にするとの事であった。後でプーノのホテルでキヌアのスープを味わったが言われなければ判らないと思った。

200m位のなだらかな山を越えてプーノの町の入口に差掛かった時バスは突然停車した。検問が行われていたのである。1台1台入念に調べているので、何か事件が発生したのかと思った。その夜、プーノ唯一のデラックスホテル、イスラ・フェスティヴェスの食堂で数名の高級将校と出会い、ホテル周辺の厳重な警備を見て、午前の検問の理由が判った。武装ゲリラ対策に相違ないのだ。

ホテルはチチカカ湖の西端に近い湖畔の町、プーノの沖合数kmにある陸つづきの小島、エステヴェスに建って居り、警備し易いと思った。

三日目の午後、私共はホテルの近くから、芦のような水草トトラを編んで作られた手漕ぎの小舟バルサに乗って、近くの浮島ウロス島を訪れた。上陸してトトラの上を歩いた感触は仲々良いものであった。しかし指を差込んで調べて

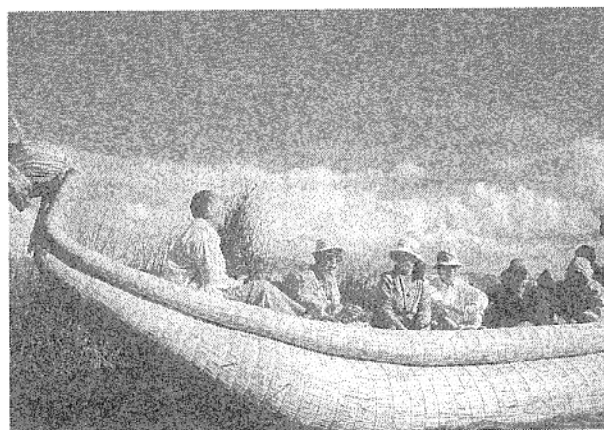


写真13 トトラ製の大型バルサ(チチカカ湖)

見ると乾いた部分は意外に薄く7cm位であった。

又人が行かないような場所へ行くと、踏み抜いて腰附近まで濡れてしまうと聞いた。島はトトラの密生した浅瀬に、刈取って乾燥させたトトラを積み重ねて作ってあるので、風で流されることは無いが、底から腐って行くので、次々と新しい材料を積み増さねばならない。島の住宅もトトラと僅かな丸太で作られ、大きな島には数十軒位の住宅が散在し、島が作られている場所もあると聞いた。

島の住民の生活はバルサで行う漁業と観光客の落す低レベルの収入によって支えられ、トトラと共生し得る人口に止まっているらしく、島の周辺の湖水に汚染の兆候は認められなかった。これに反して、ホテルと、対岸のプーノの町との間の湖面はかなり広く青粉で覆われていた。よく見ると、ホテル近くの方が色が濃いので、青粉はホテルから放出される富栄養排水が主な発生源ではないかと思った。琵琶湖の12倍の広さをもつ淡水のチチカカ湖は流れ出る川が無いので、ゆっくりと汚染が進行するかも知れない。



写真14 ウロス島の子供達

5日目の午前はフリアカ空港へ行く途中にあるシュスタニの遺跡を訪れた。円筒形の墓が立っている4,000mの山頂へはバスを降りて50m位の高度を登らねばならなかった。ゆっくり、何回も休みながら何とか行けたが、あと100m位が恐らく限界であろうと感じた。山道には焼物の破片が散らばっているが、前インカ期のは滅多に見つからない。しかしインディオの

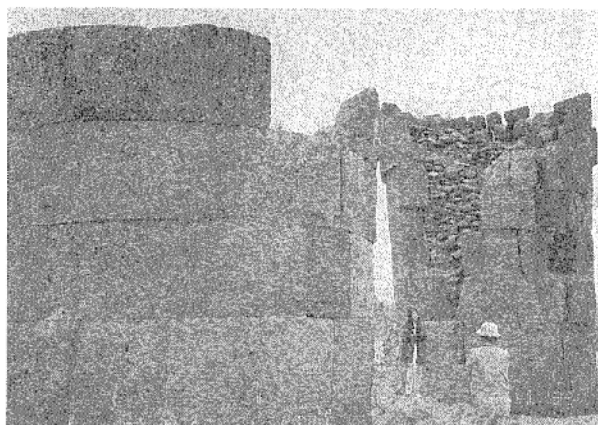


写真15 円筒型の墓(シュスタニ)
山頂附近に100基位立っていたと言われるが現在は6基。全部東側に開口部がある。

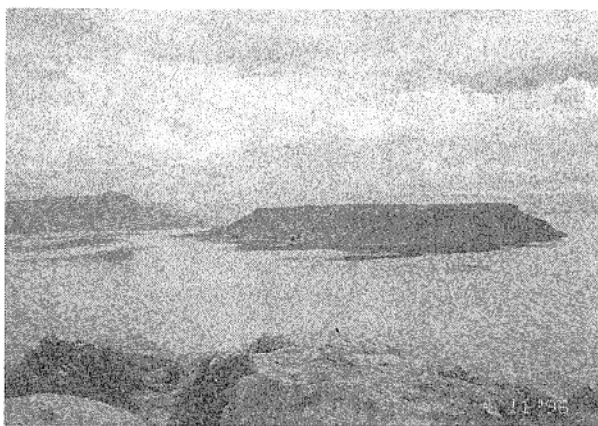


写真16 シュスタニの頂上(～4,000m)の眺望ウマヨ湖、雨季にはチチカカ湖とつながることがある。

子供から大き目の陶片を買うことも出来る。

山を降りて200m位低いフリアカ空港に着いた頃は不思議にも体調はかなり良くなっていた。一旦山登りをした効果か、それとも、すぐ下界に降りられると思った為かは判らない。

フリアカを午後2時に出発、アレキバ経由でリマに4時20分に着陸、すぐバスに乗り、パンアメリカンハイウェイを450km南下、9時過ぎイカのリゾートホテル、デュナスに到着した。

ナスカの地上絵(5日目)

イカから約200km南のナスカ高原の地上絵は余りにも有名である。その作られた動機は様々に論じられているが、空からしか絵柄を知ることには出来ない。古い昔のある時、天空からの訪問者が住民に様々な贈り物を与えて去った事があったのかも知れない。住民はその再現を願っ

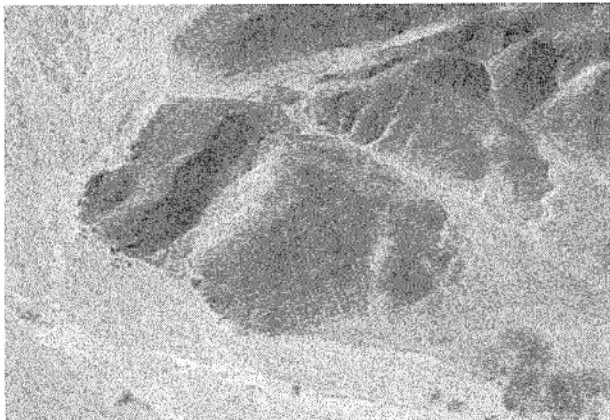


写真17 ナスカの地上絵(宇宙飛行士)
中央の山腹に描かれている。

て地上絵を描いたのかも知れない。第2時大戦中、ニューギニアでアメリカ軍が飛行場を作り、住民に様々な品物を贈ったが、間もなく飛行場は不要となり二度と現われなくなってしまった。住民は空からの訪問者を待ち続け、やがて滑走路の草を取り、お祭りをするようになったという例が知られている。

我々は小型機3機に分乗して上空から地上絵

を見たのであるが絵のコントラストが悪く、速度も早いのでパイロットに“犬だ”“モンキーだ”と言われても判別は困難で、2回目にやっと判った程度であった。当然、良い写真は撮れなかった。印刷で再現可能と思われるものを一枚示す。なお、地上絵は大小様々であるが、すべて“地上の石を除去した跡が白く見える”という原理に基いて描かれている。また、大型の絵も多数の人を使えば容易に作成し得る筈である。

あ と が き

今回のツアーは極めて効率的に作られた日程を完璧に消化した旅で、短期間に多くの見物が出来たのは良かったが、全く自由行動の余地が無かったのは残念であった。現地の事情が良く判ったので、近い将来、個人旅行でペルー北部のプレインカの遺跡、不思議な人面岩があるリマ東方のマルカワシ高原、超古代の驚くべき情景を記録した石を多数所蔵するイカの私設博物館等を訪ね度いと思う。